東北教区災害ボランティアセンター

気仙沼で百カ日法要

「手を合わせる機会いただいた」

地元が要請、参列者から感謝の声

東日本大震災から100日目を迎えた6月18日、死者・行方不明者あわせて約1500人の宮城県気仙沼市では、東北教区災害ボランティアセンターと地元住民らで組織するボランティア団体「Getバックス気仙沼」（渡辺道徳代表、44）が協力して百カ日法要を営んだ。

法要は、同市沿岸部に近い店舗の駐車場で午後5時から営まれ、地元紙の広報などで法要を知った市民ら250人が参列。調声を務めた同センターの山階照雄コーディネーター長（北海道倶知安町・東林寺住職）が表白を読み上げ、被災者とともに思いを行動にして復興の歩みを進める決意を述べた。同センターの僧侶により正信偈がつとめられる中、参列者が焼香（写真）、涙を拭いながら静かに手を合わせていた。

同市の及川美由紀さん(37)は、1歳7カ月の一人息子が目の前で津波にさらわれた。「震災から4日目に近所の男性が遺体を発見してくれるまで、声が枯れるまで名前を呼び続けた。お葬式も行えない中、ボランティアの方が火葬を手伝ってくださった。現実を受け入れられず、それでも生きることに精いっぱいの100日間だった。多くの方に支えられ、手を合わせる機会をいただいたことに感謝しています」と話し、「また会おうね、待っててね、と手を合わせました」と涙する母・幸子さん(71)と肩を寄せあった。

法要には、震災直後から遺体の捜索や搬送に携わった同市消防団第3分団の団員らも参列した。脱帽し深々と頭を下げ、手を合わせた団長の村上貴敏さん(61)は「100人以上の方々を安置所の体育館に搬送しました。団員の多くが近親者を亡くし、涙しながら作業を続けてきました。手を合わせる機会を待ち望んでいた時に、新聞で法要の記事を見て、分団で参拝させてもらおうとみんなに声をかけました。本当にありがとうございました」と話していた。

震災後、瓦礫や土砂の撤去活動や避難所での炊き出しなどとともに、被災地を訪問しながら現地で情報収集を行い、行政の支援が薄い地域を重点的にサポートしてきた同センターと、被災翌日から近隣住民と食料や生活物資の調達・搬送などを行ってきた渡辺代表が支援活動を通して協力関係を構築。渡辺代表が「本願寺から来てくださる皆さんに節目の法要をつとめてほしい」と同センターに相談していた。

同センターがご本尊や仏具を準備し、仙台市内の臨済宗寺院から譲り受けた竹を利用して、ボランティアが手作りの焼香セットを用意。心を込めた法要に参列者から感謝の言葉が多く寄せられた。

渡辺代表は「地元に浄土真宗の門徒は少ないが、宗派が違っても手を合わせる場がほしいとみんなが願っていた。復興には途方もない時間がかかり、心は休まらないが、法要を一つの節目として心を落ち着けてくれた人もおられ、救われる思いがした」と話していた。